



# ひらほく新聞

発行所 読売センター平塚北部 (ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

ひらほくで検索!  
★ホームページ・ひらほくランド★  
http://www.hirahoku.com/  
☆ホームページにて ひらほく新聞を  
閲覧・ダウンロード可能になりました!

## 徳を積み 世を照らし続ける

人は何のために生まれてくるのか。その意味を問いつけた先にあるもの。その答えはやはり、奇跡的にいただいたこの命の使い方。感謝で受け取り、いかに次へつないでいくのか。いつ終わるか分からないからこそ、日々、徳を積み、磨き続ける。そして、自分でできる在り方で、人を、世を照らし続ける。大切な人のために、奇跡的に出会った人、目の前のあなたのために。

今月号、わがままな個人的なお話の掲載をお許しください。

先月四月十五日、新潟・魚沼に住む尊敬する大切な父が、他界しました。十年ほど前に肺ガンを患った父。二年ほど前に再発し、昨年から認知症も発症。昨秋、母が春から入所していたホームに入所。何度も帰省して面会していましたが、夫婦で一緒にいることが出来たこの半年ほどはとても穏やかに過ごしていたようでした。

しかし、三月後半、一気に容態が急変、入院し四月に入ると会話も出来なくなり、意識も薄らぐようになり、四月七日夕方、妻と病院を訪れ、了解をいただき、ホームから母を連れていって会わせてあげました。最近、認知症が落ち着いてきた母は、あまりの変りようにとても驚いたようでしたが、必死で話しかけると、何と父は目をしっかり見開き、大きくうなずきました。「また来るよ」と言っ、納得したように帰ろうとする母。見ている涙が止まりませんでした。そして、一週間後、危篤を受け、駆けつけましたが間に合いませんでした。最後は、あまり苦しむことなく静かに逝った

とのこと、到着するまでにセレスト二ホールに移されていて、対面した時はとても穏やかな顔をしていました。その晩、兄弟三人で父と同室で過ごしました。たくさんのことを思い出し、有難い時間をいただきました。

翌日、施設の方が、母を連れてきてくれました。ずっと泣きながら手を合わせる母、しばらくすると落ち着いて、「しかたがないね」とポツリと言。半日、何れ度も何度も線香をあげながら傍らで過ごし、帰っていききました。父は昭和四年、男三人兄弟の長男として生まれました。そして、小学二年生の時、父親が戦死、母親は二十代で未亡人、とても厳しい祖父母たちに育てられました。上の学校へ行きかけたそうですが、農家の跡継ぎとして叶わず、私たちが子ども達には、自由に好きな道を行けと育ててくれました。五年前の夏、家族で新潟へ帰省した折、父は孫たちを前に、戦死の知らせの電報や遺児たちで訪れた靖国神社の写真、十五歳で自身に届いた赤紙など見せながら、とても貴重な体験談を話してくれました。本当に有難かったです。

私の実家はあの新潟中越地震で有名になった山古志村の隣村。雪が、三、四日も積もる豪雪地帯です。小さい頃、冬は県道すら除雪されず、圧雪車のみ、小学校はスキーを履いて登校したこともあり、ました。その頃、養豚もしていて、世話を手伝いました。真冬、大きなソリに出荷する豚を載せて、父が前で引き、自分が後ろを押して、農協までの二キロ程の道のりを行き来たことを覚えてます。

私たちが兄弟三人とも家を出て独立、夫婦二人暮らしの長かった両親。父はコシヒカリなどの稲作農業の傍ら土木業など肉体労働の兼業、そんななか頼まれて、地区(二百世帯弱の部落)の区長、農区長、会計などを長い間歴任、しかも四十代から二十数年、民生委員を続け、県知事から表彰を受けたとのこと。たくさんの参列者の方から、「村の名士だった」というとても有難い言葉をいただきました。この十年ほど晩年は、語り部として「記念誌」づくりに没頭していた父。数十年にわたる細かな日記がその几帳面さを物語っています。

葬儀関係は、田舎の細かなしきたりも、本家筋の方が全て長男に教えてくれ、一緒に仕切ってくれました。葬儀は本来、実家でやるのが基本の田舎ですが、現在住んでいないことと、残雪がまだ多いのでホールにて行いました。そういう場合、部落の人たちは「知らせ」が廻ると、「御明かし」といって「線香とロウソク」を巻いた物とお香典を持って、ホールではなく、実家にお悔やみに参つてくれるのだそうです。亡くなった翌日午前中には、頼んだわけではないのに、土建業の方が重機で玄関前のまだ多い残雪を綺麗に除雪してくれました。その玄関に簡易式のお焼香場が設置され、三日間で百数十名の方が参つてくれました。

何より驚いたのは、ホールでの告別式の後、火葬場へ向け出棺した霊柩車と私たち親族が乗るバスがその途中、実家へ立ち寄った、そこでの光景でした。予定時間を30分以上過ぎていたのですが、そこには部落の人たち百数十名の方たちが寒い中、みなで見送ろうとずっと待つていてくれました。

部落に伝わる『野辺送り』という風習だそうです。バスを降り、久々に見る、位牌を持つ母の姿に涙する方もいました。喪主である長男が、マイクで挨拶。ホールにいたいた多くの生花の半分ほどが運ばれてあり、家の玄関から通りへずっと並べられていて、沢山の人がまさに花畑で送られるようでした。再度、バスに乗車、出棺の時、あれだけ多くの地元の人に送っていたでいて、父もさぞや喜んでくれていたであろうと、本当に感動と感謝でいっぱいでした。

実は自分は双子の生まれ。昭和三十年代の新潟山間部でのこと、近所の看護婦さんが産婆さんも兼ねていて、産まれる前から、双子で片方の子は無理でしょうと分かっていたらしいです。現代では考えられませんが、その当時はそれでしようがなかったのでしょうか。未熟児で産まれた自分の後産まれた弟は、その日亡くなったそうです。小さい頃は、うちのお墓の一番右端に丸い石のお墓があって、そう教えられました。自分は、素直に生きる『直』、そして弟は『光久』と名前をいただきました。素直に人の話を耳を傾け、いつかしく人に光を与え続ける。『徳照』は父の戒名でいただいた有難い言葉です。まさに徳を積み続け、人に尽くし、人を照らすためにその生涯を貫き通した素晴らしい父。その思いを心からしっかりと受け取って、今後の自らの人生につなげていくことを誓いました。

実家で、一昨年父が投稿した文書が載っている老人会の機関誌を発見。最後に紹介させていただきます。

『小学二年生の思い出』  
私が二年生の七月七日に、支那事変が勃発、八月二十五日頃、小平尾(部落の名前)の在郷軍人のところに、赤紙が舞い込み始め、私の父のところには、九月十五日に高田三千連隊に入隊すべしという赤紙が、九月十日に参った。

父には弟が一人居ったので、最後の別れになるかも知れないから、帰ってくるよう電報を打ったが、弟は海軍軍令部に勤務のため、戦時中は席を空けることは出来ないという返電が参り、公務ということで致し方なく、父が上京して別れを惜しんだという話を聞き、子供ながらに胸が詰まる思いがした。

九月十五日に出発した父は、上海に上陸。そして、十一月八日に戦死したという公電が参り、学校からお屋上がりしたら、親類の方々が大勢集まっておられた。お前は家に居てもどうしようもないから、学校へ行くようにと家人に言われ、午後学校に行ったが、友達から「ネラツア(君の父親)は靖国神社に神様として祀られるがんだが、いいのう」と言われると、涙が出て仕方がなかった。とても学校に居ることが出来ず、帰宅し、蔵の後ろの人の見えないところで、精一杯泣いた悲しい思い出がある。

『修学旅行の思い出』  
五年生の七月下旬頃、五・六年生で修学旅行に出掛けた。一行は越又分校を入れ、五年生が二十六人、六年生が四十四人、計七十人であった。小出駅より汽車に乗り、東三条で弥彦線に乗り換え、弥彦下車、旅館は万代橋の西詰の福島屋旅館であった。大きな旅館で、私共のほか、福島県の小学生が泊まって居り、大喧嘩をして先生を困らせた。

一泊して翌日は、ポンポン蒸気車に乗り、信濃川を下り、佐渡汽船乗り場で折り返したが、女の子供達は船酔いをして大変であった。何か弟達におみやげをと思つて、百貨店に入ったが、支那事変の真つ最中で何もおみやげになる物がなく、とても残念であった。一番喜んでみんなが買ったのは、バナナとスルメであった。ほとんどの子供達が初めて口にした食べ物で、バナナは少し色が悪かったもので、先生方が心配して沢山買わないようにと注意された。

## 感謝合掌